

ブラジル特報

Notícias e Informações

No. **1621**

2014 年 7 月号



サンフランシスコ河中流域のソブラディーニョ湖・ダム（南米最大の人造湖）
写真提供：岸和田 仁『ブラジル特報』編集人

ÍNDICE／目次

軍政の記憶 2	
—ドキュメンタリー映画『21 年間続いた 1 日』によせて—	
鈴木 茂	
●社会・文化 4	
どうなる！ ブラジル大統領選挙	
駒形 秀雄	
20 周年を迎えた通貨レアルの功罪 6	
浜口 伸明	
最近のブラジル政治経済事情 8	
—外務省中南米局提供情報その他より	

●日系企業シリーズ 9	
ブラジル新東工業	
ブラジル事業創業 41 周年	
伊藤 直樹	
●文化評論 10	
話題の映画『ジェットウリオ』	
岸和田 仁	
●エッセイ 11	
ブラジルにルーツを持つ子どもたちのために	
小高 利根子	
イベント・新刊書紹介、「お知らせ」..... 12	

発行：一般社団法人日本ブラジル中央協会

〒105-0003 東京都港区西新橋 1-1-15 物産ビル別館 1 階 電話 03-3504-3866 FAX 03-3597-8008

発行人：大前孝雄 編集人：岸和田 仁

URL : <http://nipo-brasil.org/> E-mail : info@nipo-brasil.org/

頒布価：700 円

軍政の記憶—ドキュメンタリー映画『21 年間続いた 1 日』によせて—

鈴木 茂（東京外国語大学教授）

はじめに

ワールドカップの陰に隠れて日本ではほとんど報道されていないが、今年はブラジル大統領選挙の年でもある。民政移管後に制定された現憲法では大統領任期が4年と定められ、最初の大統領直接選挙が1990年に行われたために、ブラジルの大統領選挙は必ずワールドカップと同じ年に実施されることになっている。そして、通例6月から7月に開催されるワールドカップでのブラジル代表チームの成績は、10月（一次投票）から11月（上位2候補による決選投票）にかけて行われる大統領選挙に少なからぬ影響を及ぼすとささやかれる。

ブラジルにおけるサッカーの政治利用といえば、軍政下の1970年メキシコ大会ほど露骨であったことはないであろう。1968年12月、「13の金曜日」に発表された軍政令第5号(AI-5)で国会を閉鎖し、合法的な反政府活動の息の根を止めた軍事政権は、ブラジル代表チームの勝利によって国民の不満を解消しようとした。「9000万国民の心を一つにして」代表チームを鼓舞しようと歌う「進め、ブラジル!」は、ブラジルが初めて優勝した1958年スウェーデン大会の「ワールドカップはわれらのもの」と並んで、いまでも最も有名な応援歌である。

その軍事政権が始まってから、今年はちょうど50年の節目にあたっている。ブラジルの軍部は、キューバ革命の5年後の1964年、クーデターでジョアン・ゴラル（ジャンゴ）政権を倒し、1985年までの21年間、権力を握り続けた。ブラジルに続いてアルゼンチン、チリ、ウルグアイなどの他の南米諸国にも軍事政権が成立したが、それらと比べても最長であった。今年に入り、新聞や雑誌、テレビなどで1964年クーデターを取り上げた特集が組まれたり、シンポジウムや回顧展などの行事が開かれたりしている。軍事独裁体制の記憶とどのように向き合おうとしているか、ここでは1964年クーデターの重要な論点の一つとなってきたアメリカ合衆国の介入について、一本のドキュメンタリー映画から考えて見たい。

ケネディーの冷戦思考とブラジル

2011年4月にブラジルの公共放送「TV ブラジル」で放送され、2013年3月に映画版が劇場公開されたド

キュメンタリー『21 年間続いた 1 日』(O Dia que Durou 21 Anos)は、軍事クーデターから40年後の2004年頃から公開されはじめたアメリカ合衆国の国家安全保障史料館所蔵の秘密文書などを利用し、ゴラル政権打倒へのアメリカ合衆国の関与を暴露した話題作である。1964年クーデターへの米国の介入については、こうした情報公開を受けてすでに専門的な研究が発表されているが、ブラジルの一般市民にとっては、この作品を通してはじめて知る事実も多かったようである。この作品のプロデューサー、フラヴィオ・タヴァレスは、軍政下で逮捕されて拷問を受け、長く亡命生活を余儀なくされたジャーナリストで、1969年9月にリオデジャネイロで起きた米国大使誘拐事件（これを描いたブルーノ・バレット監督の映画『クアトロ・デ ィアス』は1997年に日本でも公開された）の際に、米国大使の解放と交換に釈放されてメキシコに送られた15人の一人でもある。監督のカミロ・タヴァレスは、父フラヴィオがメキシコ亡命中に生まれている。

『21 年間続いた 1 日』は、1961年8月25日のジャニオ・クアドロス大統領の辞任とジョアン・ゴラル副大統領の大統領昇格から、1969年9月の米国大使誘拐事件までを描いている。しかし、何と言っても圧巻は、1961年から1966年まで米国駐ブラジル大使を務めたリンカーン・ゴードンと米中央情報局(CIA)出身の軍事アタッシェ、ヴァーノン・ウォルターズの活動、ケネディー、ジョンソン両大統領の対ブラジル政策が、極秘公電や電話の録音記録から明らかにされている場面であろう。

ケネディーは「第2のキューバ革命」を阻止するため、1961年3月、ラテンアメリカ諸国向けの援助プログラム「進歩のための同盟」を打ち出す。同年8月17日には、計画実施のためにキューバを除くラテンアメリカ19カ国と「プンタ・デル・エステ憲章」が結ばれるが、一週間後の8月25日、ジャニオ・クアドロス・ブラジル大統領が突然の辞任を発表した。憲法の規定では、副大統領のジョアン・ゴラルが大統領に昇格することになっていたが、軍部と保守派は労働組合と強いつながりのあるゴラルの昇格に反対する。結局、議院内閣制導入によって大統領権限を制限する憲法修正を経て、軍部・保守派もゴラルの昇格に同意するが、ケネディーはゴラル政権の成立をブラジル共産化の脅威と捉え、CIAを使ってブラジルの軍部・保守派に資金を提供し、同年11月には反ゴラル宣伝機関「ブラジル社会研究所」(IPES)を設立させた。そして、



『21年間続いた1日』のDVD

力してゴラール政権転覆を工作するよう、ゴードン・ブラジル大使に指示した。

1964年軍事クーデターとアメリカ合衆国

1963年11月にケネディが暗殺され、大統領に昇格したジョンソンも「共産主義のパラノイア」に取り憑かれていた。ゴードンやウォルターズは、ゴラール政権の「共産党への接近」やブラジルにおける「共産主義の脅威」に関する情報をホワイトハウスに送り続け、「革命計画」（軍部はクーデターをこう呼んだ）を知らされると、直ちにワシントンに通知する一方、支援のためにブラジルへの軍艦の派遣と武器・弾薬、燃料の提供を要請する。クーデター前日の1964年3月30日には、CIAが収集した情報として、サンパウロとミナスジェライスの知事がクーデターに合意したことと、ミナスジェライス州に駐屯していた第4軍管区司令官モウラン・フィリョ将軍の部隊が挙兵し、リオデジャネイロに進軍するというシナリオが伝えられた。翌3月31日午後、米 국무省からゴードン大使宛に送られた秘密電報には、「ブラザー・サム」と名づけられたこの作戦の詳細な内容、すなわちカリブ海アルーバ島から燃料を積んだタンカーを派遣すること、最初のタンカーは4月8日から13日の間にサントス沖へ到着すること、軍事演習を名目に4月10日までに空母1隻、4月14日までに駆逐艦4隻、2機の戦闘機、タンカーを派遣すること、命令から24時間から36時間の間に110トンの弾薬、催涙ガスを含む装備品をサンパウロ州カンピナスに空輸することが記されていた。この電文とともに、スクリーンには米国東海岸を出港した駆逐艦がアルーバに寄港し、ブラジル沿岸に向かう様子が映し出されている。

ブラジル軍政の「予期せぬ」進路

実際、1964年クーデターはこうしたシナリオ通りに進んだが、唯一、米国側の思惑が外れたのは、4月2日にゴラール大統領が抵抗することなくウルグアイに亡命し、

大規模な流血が起きなかったことである。すでに4月1日、ゴードン大使はホワイトハウスに国際電話をかけ、ただちにブラジル新政府を承認するよう要請していたが、これを受けて4月2日に米国は早々と下院議長ラニエリ・マジェリを臨時大統領とする新政府を承認した。ゴードン大使とジョンソン大統領の電話での会話が生々しい。そして、4月11日、クーデターの首謀者であった陸軍参謀司令官カステロ・ブランコが軍部によって大統領に選出されるが、米国大使館は増額された潤沢な予算を使い、ブラジル政府にさまざまな人材を送り込んでいった。映画は、こうした軍政への米国の関与の増大がブラジル国内の反米意識を高め、1969年の米国大使誘拐事件の伏線となったことを示唆している。

実は、もう一つ米国政府の予想が外れたことがあった。軍事政権による人権侵害である。とりわけ1968年の軍政令第5号(AI-5)公布を境に不当逮捕や拷問が激化した。軍政3人目の大統領メジシと5人目で最後のフィゲイレードは国家情報局(SNI)長官を歴任した人物であったが、反政府活動家の情報はSNIから政治警察に送られ、捜査と拷問は陸軍の「情報作戦部・国内防衛作戦センター」(DOI-CODI)が担当した。ゴードン大使すら残酷な拷問には困惑したとされるが、映画の中では被害者の写真とともに、「私は、われわれが（ブラジル）政府の非合法活動もしくは行き過ぎを正当化しようとしないうちは、沈黙こそ金というのがわれわれのとるべき最良の決定だ」との結論に至りました」との同大使の電文が紹介されている。そして、「すべては民主主義の名の下に行われた」という米国の政治学者のコメントで映画は終る。

おわりに

軍政下のラテンアメリカを描いた映画としては、チリのアジェンデ政権崩壊を取り上げた『サンチャゴに雨が降る』（コスタ・ガヴラス監督、1975年）やチリやアルゼンチンの「行方不明者」や亡命者を取り上げた『ミッシング』（コスタ・ガヴラス監督、1982年）、『オフィシャル・ストーリー』（ルイス・プエンソ監督、1985年）、『タンゴ・ガルドの亡命』（フェルナンド・ソラナス監督、1985年）などがすぐに頭に浮かぶ。ブラジルについては、先述の『クアトロ・ディアス』が日本でも公開されている。それ以外にも、ブラジルを含む各国で多くの劇映画やドキュメンタリーが制作されてきた。

民政移管後のブラジルでは、1995年から現在に至る約20年間は、直接選挙で選ばれたすべての大統領が任期を全うしてきており、民主主義が確実に根付いたと言えるであろう。しかし、軍政の記憶が忘れられたわけではない。『21年間続いた1日』には軍政の記憶を新たに呼び覚まし、それによって民主主義を深化させようとするブラジル国民の意思が感じられる。

どうなる！ ブラジル大統領選挙

駒形 秀雄

(企業コンサルタント)

今日日本でブラジルと言えば、6月12日から始まるサッカー世界大会でしょう。しかし現地ではこのお祭り騒ぎとは別に大きな事案が動いております。それは10月5日に行われる大統領、各議員などの選挙とその陣取り合戦で、現在、各陣営は規則に触れない範囲内で活発に動いております。即ち、中間グループの自派への抱きこみ工作、反対グループのスキャンダル、汚職告発による離反画策、頻発するデモや大衆運動を自派の宣伝に利用すること、などです。ここでは国の方向をも左右する大統領選挙に的をしばって現在の動き、これからの展望などを御紹介致します。

有力候補はどんな人？

各党の大統領候補は6月中の党大会、それに次ぐ、7月5日期限の公式登録を待って最終確定するわけですが、既に候補として次の様な人達が挙げられています。

▶ **ジルマ (DILMA ROUSSEFF)** 現大統領。67才、PT (労働者党) から出て再選を目指している。前回の選挙では当時の大統領で絶大な人気だったルーラ (LULA) の全面的支持を得てブラジル初の女性大統領となった。世論調査では候補者中トップの40%近い支持率を得ている。

▶ **アエシオ (AECIO NEVES)** 上院議員。56才、PSDB (社会民主党) 党首でPTに奪われた政権奪還を目指している。自身が知事だったミナス州、同党所属知事を擁するサンパウロ州などの有力選挙区に強く、支持率は16% - 20%で2位につけている。

▶ **カンポス (EDUARDO CAMPOS)** 前ペルナンブコ州知事。49才、ルーラ政権時代に大臣の経験もあり、地元での人気は高い。前回大統領選挙で大量得票を得自然環境保護団体などの支持層をもつマリーナ (MARINA) を副大統領候補にすえて10%台の支持率で人気3位。新鮮さが魅力と言われる。

ブラジル選挙の特殊性

発展途上国ブラジルの選挙事情は日本のような成熟社会、高度教育国とは相当に異なるので、まず、これらの特性の理解が必要となります。

相違点の第一は国民の貧富の差が非常に激しく、大きな

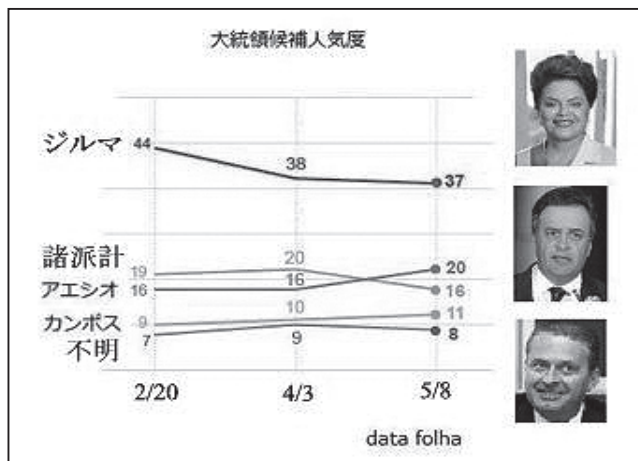
資産家がいるかと思えば、他方、住む家や明日の食べ物にも事欠く階層が多数居る。教育レベルでも、TVは見るが印刷された文字などはまず読まないと言う層が3割はいると言うことです。ブラジルの投票は義務制ですから、この様な低所得、低学歴層も企業家や知識層と同じく“一票”となります。従い、候補者としては、政党幹部間の合従連衡工作とは別に、この様な大衆層の歓心を買う政策を採らねばならないのです。

次に、この国では日本の23倍もの広大な土地に2億人近い人口が散らばっているのも、全国民に候補者の政策や人となりを知ってもらうことは相当な困難を伴います。ジルマ大統領の様に現職の人は露出度も高く、良くも悪くも知名度は高くなりますが、アエシオ (元州知事)、カンポス (前州知事) などは地元での支持率は高いが、それ以外の地域での知名度はいまひとつ、となっています。全国で、短い時間で、どのようにして一般庶民大衆の支持を取り付けるか？これが得票アップの鍵となる訳です。

もう一つ、ブラジルでは第1回選挙で1位候補が有効投票の過半数を得られなかった場合、1位と2位との間で、10月26日に決戦投票が行われます。現在人気1位のジルマを攻撃するのは良いが、自分が2位になって決戦に残りたい、と も一人の候補 (アエシオ か カンポス) を手ひどく攻撃すると、最後の決戦で、3位候補にそっぽを向けられます。この辺どうするか？ 微妙な配慮が求められる事になります。

各派の動きと思惑は

ブラジルには政党の数が32あります。弱小政党からは10名以上の立候補が予定されていますが、いずれも1%前後の人気度なので、ここでの説明は省きます。



主要3候補者の世論調査による支持率は下表の通りです。これで分かることは1位のジルマの支持率(40%弱)が下向きになって来ていること、2位アエシオ(20%近く)が上向き、3位カンボス(10%程度)も若干上向きということです。

従来、ジルマ候補は一回目の選挙で当選有力と見られてきていたのですが、もし、この下向傾向が続くと、2次決戦投票にもつれ込み、大衆の離反、野党連合の成立などがあれば、現職大統領の落選、新人による政権交代という事態も起こりうるのです。

各陣営の思惑

▶PT(労働者党) ジルマの拒否率が35%と高いのに、前大統領のルーラ(LULA)の拒否率は17%と想定候補者中の最低です。また、同氏は人気度抜群で、もし立候補すれば一回目で当選という世論調査結果が出ていて、候補をジルマからルーラに変えて政権を維持しよう＝「ルーラを戻せ」という党内の動きもあります。

これは6月中旬の党大会で明らかになるでしょう。PTではこれとは別に国会第一党―PMDB(ブラジル民主運動党)のテメル前党首を副大統領候補にして、造反があったりして中々纏まらないこの党の支持を固めようとしており、更に、以前は仇敵の間柄だった、マルフ(元サンパウロ州知事、PP党)の支持もととりつけて支援層を拡げております。

▶PSDB(社会民主党) アエシオは地盤のミナス州や同盟州での票固めのほか、他の地区への浸透を図り全国的候補にならねばなりません。そのため票を集められそうな有力者を副大統領候補に選ぼうと種々工作を進めていますが、候補者は一長一短、まだ決まっていません。

また、マスコミなどを通じ現政権への批判を強め、PTが他党取り込みで増やした省=大臣の数が30以上にもなっているのを、半分に減らすと公言しております。他方、景気振興策で企業家筋にも食い込んで、それら言動が最近の支持率の向上に反映されています。

▶PSB(社会党) カンボスは元はPT所属で地元東北地方に多い低所得層から圧倒的な支持を得ていました。しかし、最近ではPSDBの過去の政権時代の業績も認める柔軟な発言をし、南西部に多い高教育層、企業家層の理解を得ようとしています。

それに新鮮な印象を与える容姿と相俟って、本格TV宣伝が始まれば女性層、若年層などに支持を広げる可能性があります。他方、これとは別に、同グループは前回大統領選挙で大量得票したマリナ(元大臣、上院議員)を副大統

領候補に獲得しており、東北地区、環境保全勢力の支持を固めています。

それでどうなる？

現在注目を集めているサッカー世界大会の選挙への影響はどうでしょう。サッカーと政治は関係ないという説もありますが、もしこの大会でブラジルが早い段階で敗退すれば、「こんな大会に我々の税金をつぎ込んで何だ！ そんな金があるなら苦渋する国民の生活を良くするために使え！」という既に出ているジルマ政権への不満が爆発する恐れがあります。

逆に、ブラジルチームが劇的な戦いをして優勝でもすれば、タイミングは絶佳、現政権への不満は消し飛ぶと期待されます。

もう一つ、ブラジルの選挙では各党候補に無料のラジオ・TV宣伝時間が提供されます。8月19日開始で投票直前までゴールデンアワーに放映されますから、この国ではその効果は絶大です。本放送開始後に各候補への支持率が大きく変わる可能性がありますから、各党とも他党との提携による放送時間の拡張、専門家起用による内容の充実などに金と知恵を絞ることになります。

この面でも大政党をバックに持つジルマ候補はダントツの宣伝時間を確保出来、豊富な資金で実績のあるマーケティング専門家も雇えて有利です。その上、“ボス”ルーラの全面支援を得れば、一回目での当選極めて有望となるでしょう。

日本側として何とか勝って欲しい人はアエシオ候補でしょう。アエシオの地元ミナス州には日本側は古くから多額の投資をしてきています。鉄鉱山の開発、鉱石輸入、ミナス製鉄所の建設、セニブラ・パルプ産業の創設などです。

これが原料輸出頼みだったミナス州の近代化、発展に大いに寄与して来ており、地元のアエシオもこれらの“日本の協力”を長年体験し、見聞きしてきています。日本の国や人についての理解、親近感も一番です。大統領に当選しながら、就任直前に死去した祖父タンクレッドの志をついでこの国に改革をもたらせるか！ 期待は広がります。

サッカーに沸き、選挙活動に揺れるブラジルですが、一般社会情勢は厳しさを増しています。殺人を含む凶悪犯罪は後を絶たず、物価高に不満な大衆の暴力デモ、警官や裁判官のストライキまで惹き起こしています。これら候補者たちも、政治改革やら、海外進出などという大きな話ばかりでなく、この様な一般社会層が直面する問題の解決策を提示して貰いたいものです。

この様な解決策を提示、実現できる候補こそが、大統領当選の本命と言えるかも知れません。

20 周年を迎えた通貨レアルの功罪

浜口 伸明

(神戸大学経済経営研究所教授)

歴史的転換点となったレアル・プラン

レアル・プランが開始したのは 1994 年であるから（公式には暫定令 MP434 号が施行された 7 月 30 日をもって開始とする）、もう 20 年前のことになる。当時まだ子供だった今のブラジル人の学生や若手研究者と話していると、ハイパーインフレを知識としてわかっていても実体験として知らない人たちがいて、そのころすでにレアル・プランについていくつか拙い論文を書いていた自分の齢を思い知らされることになる。

正直に言うと、レアル・プランが歴史的転換点になる成功をおさめ、20 年後にこうして文章を書くことになるとは、当時予想できなかった。それまで、「クルザード・プラン」、「サマー・プラン」、「ブレッセル・プラン」、「コロル・プラン I・II」など、経済安定化政策が矢継ぎ早に繰り出されたがどれも効果は短命で、しかも失敗を繰り返すたびにインフレのぶり返しはどんどん激しくなっていた。このためレアル・プランも泡沫的な運命をたどるのではないかと予断を持って見ていたことは否定できない。しかし結果的に、レアル・プランはブラジルをインフレとの戦いから解放し、経済状況を劇的に改善した。

レアル・プランとともに、現在も使われている通貨単位「レアル」が導入された。レアル以前に使用されていたクルゼイロはブラジルの国旗や国歌の中の象徴である南十字星が語源であろう（Wikipedia ポルトガル語版によると、この呼称を最初に提案したのは、かの文豪マシャード・デ・アシスである）。80 年代後半から 90 年代前半にかけてインフレが激しく高進したブラジルでは、クルゼイロのマイナーな呼称変更やデノミが何度も行われた。そのたびにすべて新しい紙幣に交換するわけにもいかなかったのだろうが、たくさんのゼロが付いた古い紙幣に判を押したものが新しい単位の紙幣として流通しつづけ、いかにも「紙切れに等しい」という印象が残っている。

なぜ新しい通貨はレアル (Real) だったのか。1993 年 8 月に、イタマル・フランコ政権はそれまで使われていた 1000 クルゼイロのゼロを 3 つ取るデノミを行い、新しい通貨をクルゼイロ・レアルと呼んだ。ちょうどその 1 年後にレアル・プランが開始され、クルゼイロ・レアルから忌まわしいクルゼイロを外してレアルになったのである。ところで、レアルという通貨がブラジルで使われたのはこの時初めてではない。もとはポルトガル王国で 1430 年から使われていた通貨であり（レアルは王を意味する）、植

民地時代にブラジルでも使われ、独立後も変更されなかった。このときのレアルの複数形は現在の「レアリス」ではなく「レイス」だった。レイスもインフレの影響を受けて価値が下がり、千を意味するミル・レイス、100 万を意味するコントス・デ・レイス（あるいは簡単にコントス）と変遷したが、1942 年にクルゼイロが採用されるまで、「レアル」の時代があった。

レアル・プランを主導したカルドーゾ元大統領の回想録 (Cardoso 2006 p.186) によると、レアルはそのような歴史的な重みを感じさせるとともに、「リアル」という意味があることから、今度こそ実質価値のある長く使われる通貨にするという意味が込められていた。まさにその思いどおり物価は安定し、ブラジル経済は息を吹き返した。

レアル・プランのしくみ

再びカルドーゾの回想録によると、彼は 1993 年 5 月に外務大臣として訪日した帰途のニューヨーク滞在中、イタマル・フランコ大統領（当時）からの電話でかなり強引に財務大臣に任命され (Cardoso 2006 pp.175-177)、E. Bacha、A.L.Resende、P. Arida、G. Franco、P. Malan など錚々たるエコノミストを集めて、金融と財政の一体的改革案として練られた計画がレアル・プランとなった。

レアル・プランの特徴は名目為替レートをアンカー（錨）にしたことにある。ハイパーインフレ下で諸物価は為替レートと連動して変動していたので、計算上は為替レートを固定すれば物価上昇も止まるはずである。もちろん、固定した為替レートが維持可能でなければ何の意味もないので、整合的な金融政策を実施しなければならない。つまり、固定為替レートのアンカーであえて政策の裁量の自由度を無くしてしまうことによって、かえって政府・中央銀行の信認が高まるというわけだ。

レアル・プランを実施するために必要な経済環境も急ピッチで整備された。第 1 に、1994 年の外貨準備は 80 年代から 90 年代初めの平均的水準よりも 3 倍以上に積みあがっており、固定レートを守ることができた。第 2 に、固定レート導入前に、実質価値単位 (Unidade Real de Valor: URV) という疑似貨幣単位を試運轉的に施行する移行期間を設けて、混乱なく為替レート体制の変更が国民に受け入れられるようにした。第 3 に、固定レートを維持する抑制的金融政策と整合的に財政政策の規律を維持しなければならない。カルドーゾが大統領に就任したあと、しばらくは連邦予算の一部を各省庁に配分せず、財務省の

緊急社会基金 (Fundo Social de Emergência) の集中管理下に置いた。

最終解決策とならなかったレアル・プラン

レアル・プランはブラジル国民に物価の安定をもたらした。特に貧困層にとって、物価安定が実質購買力を保全する意義は大きく、その後ブラジルで貧困削減が進む礎となった。他方、それまでインフレで利益を得ていた金融機関の中には経営破たんし追い込まれるところが出た。政府は金融システムの健全性を維持するために問題を抱えた金融機関の救済や他機関による合併、買収を進めるプログラム PROER に多額の公的資金を投入しなければならなかった。PROER は特に状況が悪かった地方の州立銀行の民営化と並行して進められ、結果的に銀行部門の集中と外資の参入をとまなう近代化につながった。

しかしレアル・プランはその持続可能性に2つの主な問題があった。第1に、レアルはレアル・プラン以前と比較して約30パーセント実質増価し、ブラジル製造業の競争力低下をもたらした。中央銀行は名目為替レートを小刻みに調整したが、インフレ率はそれを上回っていたからだ。このため輸入が急速に増加し、経常収支赤字が拡大した。

第2に、金融政策の自立性が失われていたので、固定為替レートを維持できるよう外貨バランスを保証する金利水準を受け入れなければならず、高金利が常態化し、経済成長の障害になった。金利はただ高止まりになっただけでなく、国際経済の状況に反応して急激に海外に資本が流出すると、そのたびに金利がスパイク状に跳ね上がるような、外生ショックに脆弱な状況を作り出した。1997年のアジア通貨危機、98年のロシア・ルーブル危機など、新興経済国の過大評価された通貨を対象にした投機的資金の動きが激しくなると、1998年末にはブラジルも外貨繰りが厳しくなり、レアルを固定相場で買い支えることができなくなった。結局99年初めに固定為替レートを放棄して変動相場制に移行することになり、レアル・プランはその役割を終えた。

通貨レアルのその後

ブラジル政府・中央銀行は通貨レアルを変動相場制に移行するに際して、金融政策の信認を維持するために、ハイパーインフレ期に行われていたような裁量的金融政策に戻るのはではなく、他のアンカーによりルール化した金融政策が必要と考えていた。この時導入されたのが、現在も続いているインフレ目標政策である。

この政策枠組みでは、政府が目標インフレ率を発表し、中央銀行がインフレ率を目標に近づけるように金融政策を実施する。金融政策の効果が出るまでタイムラグを考慮すると、実際に中央銀行が働きかけるのは市場のインフレ期待（たとえば金融機関の1年後のインフレ率の予測）である。インフレ目標政策が物価の安定に成功するために、中央銀行は経済状況を的確に診断して金融政策を決定する能力のほかに、市場に政策意図を理解させるコミュニケー

ション能力が要求される。中央銀行は、毎週主要な金融機関の予想を調査して報告するニュースレター Focus や、年間8回開催される金融政策決定会合 (COPOM) の議事要録、および四半期ごとに刊行するインフレ・レポートなどによる情報提供を重視している。この努力により、金融機関の間のインフレ期待のばらつきが小さくなり、インフレ期待が適切に修正されるようになっている。

また、当然ながら金融政策への信認が不可欠である。制度上の中央銀行の独立性は確立していないが、1999年に施行された財政責任法の下、プライマリー財政黒字目標を達成することを政府が確約し、金融政策が財政政策に従属しないことを保証することは重要である。また、中銀は物価安定に専念すべきであり、金融政策で為替レートの水準に影響を与えようとしている印象を与えないように変動相場制を維持することも必要となる。

インフレ目標政策に転換したことによる最大のメリットは、金利を引き下げる自律性を得たことである。これにより、個人向け融資が拡大し、ルーラ政権下の大衆消費ブームと新中間層の台頭に結びついた。

しかし、国際経済環境から影響を受けやすい脆弱性は残されている。先進国の大規模な金融緩和により発生した余剰資金が金利差に引き付けられて急激に流入し、通貨の過大評価が進み、経常収支赤字の規模はレアル・プランの倍以上に拡大した。

現在のジルマ・ルセフ政権下で、リーマンショックや欧州経済危機の影響を受けてレアルは不安定化している。中央銀行はインフレ期待がインフレ目標を超える状態が続くことを容認しつつ、政府はプライマリー財政収支黒字目標を厳密な意味で達成できていない。また2013年5月に米国連邦準備制度理事会が金融量的緩和の縮小を宣言した後は資金流出がレアルの減価を引き起こしインフレを助長した。これに対して2013年8月以降、中央銀行は為替レートの安定化を目的としたドル買い介入プログラムを継続している。このようにレアル・プラン後の経済政策枠組を支える、インフレ目標、プライマリー財政黒字、自由変動為替相場の三本柱が揺らいでいるが、金融政策だけでできることは限られている。外生ショックへの防戦に追われる中央銀行は金利を低い水準に維持できず、内需主導の経済成長は鈍化した。市場は、12年間の労働者党政権下でかえって肥大化したと言われる公的部門の大胆な構造改革を行う必要があるという、メッセージを発しているようだ。

かかる経済状況は、ルセフ大統領の再選支持率の低下にも影響を与えている。次期政権は現在レアルが置かれている不安定な状況に込められた市場のメッセージを政治家や国民はどのように受け止めるのか、大統領選挙戦の論争に注目している。



参考文献：Cardoso, Fernando Henrique 2006. The Accidental President of Brazil: A Memoir. New York, Public Affairs.

最近のブラジル政治経済事情

—外務省中南米局提供情報その他より—

10月の大統領選挙

今年は4年毎に行われる大統領や州知事等の総選挙の年であり、10月5日には投票が行われるが、ここで過半数を獲得した候補者が出ない場合は10月26日に上位2人で決選投票となる。最近実施された各種世論調査において、再選をめざすルセーフ大統領の支持率は以下のように微妙に増減を示している。

	3月	4月	5月
ルセーフ大統領(PT)	40%	37%	40%
ネーヴェス上院議員(PSDB)	13%	14%	20%
カンボス前ペルナンブコ州知事(PSB)	6%	6%	11%
他候補の合計	4%	5%	5%
白票/無効票	24%	24%	14%
分らない/無回答	12%	13%	10%

5月23日付エスタード・サンパウロ紙が伝える IBOPE 社による世論調査では、特定候補への支持を決めかねていた有権者層が候補を決め始めていること、およびその影響でいずれの主要候補者も支持率を伸ばしたが、特に野党候補がルセーフ大統領以上に支持率を伸ばしたため、4月調査でルセーフ大統領(37%) 対他候補計(25%) の差が12ポイントあったのが、今回ではその差は4ポイントまで縮まり決選投票の可能性が高まったと報じ、ルセーフ政権支持率については「悪い/非常に悪い」が昨年6月のデモ直後の不支持率を上回り過去最悪となった旨解説している。

上位2候補の決選投票になった場合は、ルセーフ大統領43%(4月に同じ)に対してネーヴェス議員は24%(2ポイント増)である。一方、各候補の拒否率は、ルセーフ大統領33%(3月比増減0)、ネーヴェス議員20%(5ポイント減)、カンボス前知事13%(8ポイント減)。ルセーフ政権に対する評価は、「悪い/非常に悪い」が4月の30%から33%に上がり、昨年6月の大規模デモ直後の31%を上回る過去最悪記録となっただけでなく、政権発足後初めて「普通」(前回4ポイント減の30%)を上回った。

今回調査は、直前に行われたPTによる「ブラジルは後戻りしない」と野党が政権に返り咲けば、失業等の「過去の亡霊」がよみがえるという恐怖心を煽る宣伝番組の影響が功を奏したとみられるが、ルセーフ政権に対する評価が下がり続けていること、拒否率が高いこと(ルセーフ大統領に投票しないと述べている有権者が全体の1/3に達する)により、今後の伸び率はあまり無いと見られると、同紙は分析している。

各地での抗議デモ、ストライキ

5月28日付コヘイオ・ブラジエンセ紙は、ブラジリア連邦区で27日に先住民が彼らの住む土地の区画整備に関して政府の関心が低く手続きが進まないことに抗議して、100の部族から約500名が参加して、連邦議会の屋上に侵入し、その後スタジアム周辺でワールドカップ(以下W杯)に反対する人々のデモと合流し、最終的に軍警隊との衝突、催涙弾に弓矢等で抵抗し負傷者を出すまでに発展して住民の帰宅に支障を来したと報じている。

15日にサンパウロでは「5月15日-W杯の正当性に対

する抗議」と銘打った、SNSを通じて集まった約1,500人のデモが行われた。今回デモは昨年6月の大規模抗議デモに比較して非常に少ない参加者となった。デモ隊の一部はW杯初戦が開催されるアリーナ・コリンチャンスに向かったが、同スタジアムを本拠地とするコリンチャンスのサポーターにより行進を止められた。

20日サンパウロ市営バス組合が予告なしのストを9時から開始、市内28カ所の近郊バスターミナルのうち16で、市内から住宅街を結ぶ205路線でもバスが運行を停止した。この影響でメトロは超満員になり、市内各地道路は今年に入って最大の261kmの渋滞が発生した。

市南部では19時に(怒った利用者の一部により)5台のバスが焼かれたが、今年で76台のバスが放火されている。また、賃金向上を求める教員1,500~6,000人(軍警発表や報道により参加者数に差がある)のデモがパウリスタ通りを行進した。一方、MTST(住居無し労働者)の8,000人がデモを行い、同グループの約1,000人が市西部の建設会社の事務所に侵入したが、同社はW杯スタジアムのある市東部地区にある15万㎡の地主であり、その場所には4月から4,000世帯が不法に滞在している。

高速鉄道計画の優先度低下

5月7日のエスタード・サンパウロ紙は、ボルジェス運輸相がルセーフ政権の目玉となっていたリオデジャネイロ-サンパウロ-カンピーナス高速鉄道計画について、「政府のアジェンダから外れたわけではないが、今この瞬間の優先課題ではない」としつつ、「個人的には本件は次期政権の課題として引き継がれるだろう」と述べたと報じている。同大臣によれば、大統領選挙の影響により企業の関心も薄れており、今政権下における入札実施に向けた動きはないとのことである。

政府は昨年8月に入札延期を決定した。これは応札の可能性があったのはフランス勢のみであったこと、また水面下でドイツ、スペイン勢が入札延期を求めて来たことによる。さらに、これら企業が地下鉄建設のカルテル疑惑に関わる捜査の渦中にあったことも状況を複雑にした。

アマゾナス州増水被害

アマゾン河中流のマナウス市は雨期の終盤にあたり、5月27日から29日にかけて主要支流のネグロ川の水位が急激に上昇し、市長が緊急事態宣言を発した。

マナウス市街地は約10km上流のネグロ川右岸に所在する河港の後背地に広がっている。ネグロ川の水位は年間を通じて約10m上下するが、高くなるのは雨期から乾期に移行する頃であるため、W杯の開催月である7月に水位が最も高くなる。高い水位は20~30日間続くと予想される。

第 **31** 回

新東工業ブラジル ブラジル事業創業 41 周年

伊藤直樹

<シントー・ブラジル・プロダクトス(有)顧問>

初期の苦闘

1934 年の創業以来、鑄造事業を中核として表面処理分野や環境関連分野においても事業展開してきた親会社、新東工業(株)がブラジルとの関係を開始したのは 1957 年のことでした。当時ブラジルへ進出した日系企業向けに鑄造プラントの輸出販売したことを皮切りに、1960 年代、70 年代は、同様に鑄造プラント、金属表面処理設備の輸出を継続し、ブラジル向けのビジネスを拡大して来ました。

そうした輸出販売から合弁方式による現地生産体制への事業展開を決断したのが、1974 年 8 月のことでした。提携先である米国 Wheelabrator 社のブラジル法人に資本参加を行い、合弁事業の共同運営を開始することになりました。しかしながら、1980 年代は中南米諸国全域に広がる累積対外債務問題の苦境の時代に突入し、ブラジルの鑄造業界も淘汰の時代となり、合弁事業も厳しい運営を余儀なくされました。この逆風の時代にもかかわらず、1982 年新規事業に取り組む判断を下し、安定した収入源となる投射材 (STEEL SHOT) の工場が、月産 500 トンで生産を開始しております。その後マイクロショットの設備も導入され、今日の拡大発展の礎となりました。

1994 年にリアル・プランが導入されたおかげで、ハイパーインフレの抑制に漸く成功しましたが、パートナーである米国 Wheelabrator 社の資本撤収が決定されたため、全額を新東工業グループで買収し子会社化しました。新東工業の技術支援をベースに鑄造機械設備、金属表面処理機のラインアップを拡充して、お客様の各種ニーズへの対応力を増強しました。

更に、1976 年より稼働を開始した鑄造工場でのこ入れも実施され、ショットブラストのインペラーライナー用に生産を開始した耐摩耗性鑄物部品 (ロングライフ) はブラジル特有の鉱山市場の成長に合わせて、大型ローダーバケット用部品、破碎機械用部品としての新規応用に成功し、生産販売量は飛躍的に拡大しました。鉱山採掘や建設現場で使用する重機の補修部品の分野へ拡大されています。

追加投資

当国の投射材市場では多くの競合メーカーによる厳しい競争が展開されていますが、弊社は追加投資を決断



サンパウロ本社入口

し、2008 年 7 月にサンパウロ市の北 84KM にあるアチバイア市に工場用地を確保しました。2010 年には土地造成工事が開始され、2012 年 2 月に最新鋭の投射材工場の拡大操業が開始されました。国内販売のみならず、南米諸国向けへの輸出版売も拡大し、中核的な事業に成長しております。

創業 40 周年を迎えた昨年 2013 年 8 月、弊社のアゼヴェード社長より発信したメッセージのなかで事業内容がより具体的に述べられていますので、ここから最近の取組みについてご紹介させていただきます。

1) サンパウロ本社工場、アチバイア投射材工場に加え、エスピリトサント州の花崗岩採掘地域を中心に販売拠点を設置して、STEEL GRIT の在庫販売を展開しております。サンパウロからのリードタイム平均 3-4 日は 1 日に短縮され、お客様からの緊急発注に対応した即納体制が確立しました。

2) 技術部門での効率化改善策として 3D ワークステーションが導入されました。

高性能 3D ワーステーション 7 台

複合組立用 3D ワークステーション 1 台

3D 設計のデータ管理サーバー 1 台

3) 機械加工工場への工作機械の追加導入

金枠加工用に高性能 CNC

SHOT 破碎用ローラー製造のための縦旋盤

最後に

南米の大国ブラジルの中長期的な発展の潜在国力は間違いなく高いと確信していますが、BRICS ブームの後退は既に広く指摘されています。来る 10 月の大統領選挙で誰が勝利しても、次期政権による経済運営、富の分配の軌道修正、調整は待ったなしの環境と思われます。

予見が出来ない政治的決断を伴う調整となる可能性が高いと思われますので、企業運営については、絶え間ない工場現場での改善運動、コスト削減運動、積極的な新製品開発、積極的な営業活動とリスク管理のバランス感覚が要求される時期とも考えられます。



アチバイア工場全景

私ども、シントー・ブラジル・プロダクトスは、創立 50 周年へ向けて、益々お客様に信頼されるパートナーとしての発展を追求して参ります。

話題の映画『ジェトゥリオ』

●岸和田 仁（『ブラジル特報』編集人、在レシーフェ）

「私はブラジルの搾取と闘った。国民の搾取と闘った。私は胸を張って闘ってきた。憎悪と侮辱と中傷に動じなかった。私は諸君に自分の生命を捧げた。今度は、私の死を捧げる。私は何も恐れない。冷静に、永遠への第一歩を踏み出し、人生に別れを告げて、歴史の中に入る。」（シッコ・アレンカール他『ブラジルの歴史』明石書店、から孫引き）という有名な遺書を書き上げたジェトゥリオ・ヴァルガス大統領（1882-1954）は、カテッチ宮（大統領府）の自室ベッドに座わり、ピストルを自らの左胸にあてて引き金を引く。

1954年8月24日、朝8時半、のことであった。

当時、翌25日の誕生日に6歳となるアントニオ・デ・カルヴァリョ・バルボーザ少年は、サンパウロ州アヴァレ市の祖父母の家だったが、ラジオで大統領の自殺を知った祖母は、「ドートル・ジェトゥリオが亡くなった」と叫ぶや、台所のテーブルに腰かけて泣き始めてしまった、という。このアントニオ少年が、長じて、芸名トニー・ハモスという俳優となり、この事件から60年後に映画のなかで大統領役を演じることになる。

5月1日メーデーに、全国の映画館で一斉封切りとなった、ジョアン・ジャルディン監督作品『ジェトゥリオ』は、良くも悪くも現代ブラジルのベースを確立したヴァルガス大統領の最後の日々、正確には1954年8月5日から24日までの19日間を、ドキュメンタリー風に再現したフィクション映画である。調査・構想に5年、製作費7百万レアルを費やした監督のこだわりは、一般公開日にまで及んだ。すなわち、労働法、労働手帳、最低賃金など現在のブラジル人労働者が恒常的に世話になっている諸制度を作り上げ、ブラジル版ファシズムを模した労働組合主義を掲げたヴァルガスにとって、メーデーは特別な意味を有する日であった。だからこそ、映画公開日をこの日としたのだ。

冒頭のシーンは、8月5日。政敵カルロス・ラセルダ（1914-1977）が襲撃され、逃げ惑う。彼自身は、足先に被弾しただけですんだが、ボディーガード役の空軍少佐フーベンス・ヴァスが銃殺されてしまったので、政治的な大事件となっていく。この襲撃の立案・首謀者は、ヴァルガス大統領本人ないし側近だろう、という噂があったという間に広がることになる。（実際の真相は今日に至るまで不明であるが。）

その一週間後の12日。ラセルダは、自身が社主を務める「トゥリブーナ・ダ・インプレッサ」紙の社説で、ヴァルガス大統領の即時辞任を要求、過激といえる言論活動を

通じて反政府・反ヴァルガス運動を展開していく。

翌13日。野党ばかりか軍部の中枢も大半のマスメディアも大統領辞任を主張し始め、この政治的プレッシャーがヴァルガス政権を追い詰めていく。

18日。大統領の護衛兵の一人、クリメリオ・デ・アルメイダがラセルダ襲撃容疑者として拘束され、大統領のボディーガード、グレゴリオ・フォルトゥナトから依頼を受けた、と証言したことから、ヴァルガスへの“包囲網”が一挙に強化されてしまう。

22日。空軍の中堅幹部たちが結束して、大統領辞任への最後通告を行う。

23日。陸軍、海軍、空軍の三軍トップが、大統領辞任を突きつける。

24日、朝8時半、ヴァルガス自殺。

という19日間が時系列的に映像化されているが、筆者にとって面白かったのは、ヴァルガスが息子に愚痴を語るシーンだ。

すなわち、医者となった息子ルテロが、父親の健康を診察するために大統領府にやってくる。診察が終わって、ヴァルガスが独り言のように語り始める、「息子よ、私が大統領として権力を握っていた20年間のあいだ、国益のために何かを陳情してきたヤツは一人もいなかったな、私のところにやってきた連中は、皆、自分の私的利害関係・私欲のための陳情しかなかった。まあ、昔から今日まで、お前の知っている通りだがね」と。

本当にヴァルガスがそう言ったのかどうか、の判断はこの映画をみたブラジル国民一人一人違うかもしれないが、筆者には、この映画はブラジルの歴史や社会を理解するための映像教材となっている。

映像がリアルなのは、監督の力と名優トニー・ハモスのおかげだろう。彼は主人公に成りきるべく、現在は博物館となっているカテッチ宮に一週間以上も泊まり込み、現場の雰囲気を感じた由だし、最後のシーンに使用したベッドも自殺に使った拳銃も、ヴァルガス本人が使っていた本物だというから、この辺のリアリズムは観客として歓迎だ。

ちなみにジルマ現大統領は、ヴァルガス主義の後継者を自任していたレオネル・ブリゾーラ（1922-2004）率いるPDT（民主労働党）に長年属しており、後になってPT（労働者党）に鞍替えした政治家である。彼女のポピュリズム的政策にヴァルガスの“影”を感じてしまうのは、筆者だけではないだろう。

ブラジルにルーツを持つ子どもたちのために

小高 利根子

(翻訳家)

ブラジルに初めて行ったのは1970年。以来、四回にわたる夫の駐在のため通算23年ほどをサンパウロで暮らしました。国民性ともいえるブラジル人のあたたかさ、懐の広さにいつも助けられて、本当に気持ちよく日々を過ごせたと思います。

その豊かな文化をなんとか日本の人たちにも伝えたいという思いから出版翻訳を始めたのが1989年。そして「最終的に帰国したら今度は日本に暮らすブラジル人のために何かさせてあげたい」と思うようになりました。入管法改訂によって多数のブラジル人が労働目的で来日するようになっていたからです。ところが、夫の退職後もITU市にある家を手放しがたく、ブラジルと日本を行ったり来たりする生活になりました。これでは継続的に責任のある仕事をするわけにはいきません。

そんなとき「日本ラテンアメリカ子どもと本の会」発足の話が持ち上がりました。中心になったのは同窓の東京外国語大学出身の女性たちで、翻訳者や大学のスペイン語教師。それぞれ仕事がありながらのボランティア活動です。これなら一緒に活動できるかも知れない、と思いました。

趣意書の一部をご紹介します。

＜…日本で生まれ育った子どもたちは日本語環境のなかで育ち、言葉の違いから親子の間のコミュニケーションの問題も生まれているということです。ポルトガル語やスペイン語とかかわってきた私たちは、そんなようすを見て、「本」を中心にして、何かでできることがあるのではと考えるようになりました。なぜなら、本は自分をうつす「鏡」や、広い世界への「窓」となって私たちに生きる力を与えてくれるばかりでなく、子どもにとっての読書（おとなに読み聞かせをしてもらう、絵本などで文字にふれる）は、現代の社会を生きるために必要な「識字」への架け橋となる経験だからです。…＞

具体的な活動は、まず、日本語で出版されているラテンアメリカ関連の本をリストアップし、その中から推薦するのにふさわしい本を見極める選書作業。次に、選ばれた108冊に日本語、ポルトガル語、スペイン語の三カ国語の書誌を作成。これを展示する初めての図書展は2011年に開催されました。その後は図書館、小学校への選出図書セットの貸し出しや、原語と日本語のバイリンガルの読み聞かせ、ラテンアメリカ事情についての出前授業などを行っています。また、選書作業は出版事情に応じて継続しています。

会のメンバーも増え、児童書の編集者、図書館司書なども加わりました。ただ、スペイン語圏の国に住んだ経験者は多いものの、ポルトガル語関係者はいまだに一



愛知県の小学校で読み聞かせ

人。目下孤軍奮闘中です。書誌のポルトガル語訳などは、たくさんの方々に協力していただきましたが、会のメンバーになってくださる方がいないのが悩み。本がとにかく大好きで、書誌を書いたり、それをポルトガル語訳していただける方、ぜひ、ご連絡ください。(会のホームページは<http://clilaj.blogspot.com> メールアドレスはtokioclijal@gmail.comです)

会の活動を通して出会うブラジルルーツの子どもたちの状況は実にさまざま。来日したときの年齢も違えば、ポルトガル語、日本語の習熟度もひとりひとり違います。愛知県の小学校に一月間選書セットを貸し出し、一日だけ原語絵本の読み聞かせに行ったことがありますが、30数人の国際学級のほとんどがブラジルルーツ。ポルトガル語が大声で飛び交い、それはそれは賑やか。どの子の顔も明るく輝いていました。

一方、こんな例もあります。実は地元の活動にも参加したいと思い、川崎・横浜を中心に活動する「多文化読み聞かせ隊」というグループにも入っているのですが、そこから川崎市のある小学校に「国際理解教育」の一環として出前授業に行ったときのこと。ブラジルから来た子は全校で一人か二人。自分のルーツを隠すようにひっそりとしていました。

そんな一人、A君の担任からその後メールが届きました。「ブラジルの授業の後のA君の豹変ぶりにびっくりです。引っ込み思案で手を挙げる事がなかったのに、積極的に発言するようになりました…」

両親の国ブラジルのすばらしさを授業で学び、級友が興味を示してくれたことがA君の自信につながったのでしょうか。そうだとしたら、こんなうれしいことはありません。

日本での生活に順応するだけではなく、自分のルーツに誇りを持ち、この国で暮らすことのメリットも感じてほしい。そんな思いを深くしています。同じような活動をしている団体とも良い協力関係を築いて、さらにきめ細かい活動を目指していきたいと思います。



☆ イベント ☆

第3回定時会員総会開催

日時：2014年6月16日（月）15：00～16：30

場所：米州開発銀行（IDB）アジア事務所会議室

主要議題：平成25年度事業報告・計算書類の承認
公益目的支出計画実施完了確認
請求書の承認
役員の選任

新任理事 藤村 修、酒井芳彦、清水茂美、宮田次郎、谷水一雄、中富道隆、岸和田 仁

新任監事 石川幸治
（理事辞任 池田 維、桜井敏浩、金子昭紀、榮 敏治、大藏公治）
（監事辞任 上田孝二郎）

総会後の臨時理事会開催

日時：2014年6月16日（月）16：30～16：45

場所：米州開発銀行（IDB）アジア事務所会議室

主要議題：副会長・常務理事の選定
新任副会長 藤村 修
新任常務理事 酒井芳彦、清水茂美、宮田次郎
相談役・顧問の選任
新任相談役 池田 維
新任顧問 桜井敏浩

☆第28回ランチョン・ミーティング

日時：2014年7月16日（水）正午～午後2時

講師：坂尾英矩氏（ブラジル音楽家協会員）

演題：ボサ・ノヴァの世界から読み解くブラジル

『ボサ・ノヴァ詩大全』の著者、

坂尾氏をお迎えして、ボサ・ノヴァの世界からブラジルを読み解いていただきます。

場所：アークヒルズクラブ（アーク森ビル イーストウイング 37 階）

東京メトロ南北線「六本木1丁目」または銀座線「溜池山王」下車

参加費：会員 5,000 円 非会員 6,000 円（当日会場にて申し受けます）

申込み：先着順 50 名様まで。食事手配の関係上、必ず事前に協会事務局へ。お申し込み後ご欠席される場合で、7月16日（水）午前10時までにご連絡いただけない場合は、参加費ご負担をお願いいたします。

その他：ドレスコード（男性）ジャケットをご着用下さい。

第33回浅草サンバカーニバル

開催日：2014年8月23日（土）

日時：午後1時30分～午後6時

場所：馬道通り～雷門通り

主催：浅草サンバカーニバル実行委員会

後援：当協会他

第9回ブラジルフェスティバル

開催日：2014年7月19日（土）～20日（日）

場所：東京代々木公園イベント広場

主催：在日ブラジル商業会議所（CCBJ）

☆ 新刊書紹介 ☆

☆『マラカナンの悲劇 ―世界サッカー史上最大の敗北』 沢田 啓明

1950年ブラジルが初めて招致したワールドカップで、ウルグアイと対決した決勝戦。新設なタリオデジャネイロの巨大なマラカナンスタジアムには20万人の大観衆の誰もがブラジルの勝利を信じていたが、まさかの逆転負けに慟哭した。今もなおブラジル人の脳裏に刻まれた悲劇を、10年に及んだ取材によって、南米サッカーの発展史、各国の特色、そして悲劇の背景とその後の選手達の哀しき人生に至るまでを描いたノンフィクション。

（新潮社 2014年5月 304頁 1,500円＋税）

☆『ブラジルの環境都市を創った日本人 ―中村ひとし物語』 服部 圭郎

ブラジルで最も住みやすい都市といわれるクリチバの環境都市・都市計画の成功の影に手腕をふるった日本人造園家・中村 轟の公園整備、動物園や環境市民大学創設、分別ゴミと余剰農産物交換などのアイデアと行動力を、生い立ちからブラジル渡航、市職員就職から公園課長を振り出しに市環境局長、後にパラナ州環境局長になって活躍した事績を通して生き生きと紹介。

（未来社 2014年3月 258頁 2,800円＋税）

日本ブラジル中央協会からのお知らせ

隔月発行の『ブラジル特報』の誌面を9月号から全面刷新いたします。これまで質の高さには定評がありましたが、とりわけ女性や若者の会員を増やすため、さらに読み応えのある「目立つ会報」にします。

まず、12ページだったページ数を一気に16ページに増やします。単なる「会報」を超えて「情報誌」のイメージが強くなるかもしれません。記事の基本精神は「ビジネスパーソンに役立つ実用情報」です。

もちろん政治・経済・文化関連も手を抜くことはありません。発行部数もほぼ倍増し、積極的に広告を載せる姿勢に転換します。

また16ページ全面カラー化を実現します。表紙はプロの写真家を起用、意外なアングルのブラジルが登場しそうです。

新コラムも続々生まれます。主にブラジルの地方都市を紹介する「あの町、この町」、女性が書く「ウーマン・アイ」、弁護士が教える「ビジネス法務の肝」、駐在記者の「ジャーナリストの目」、新たな会員企業による「新顔です、よろしく」など盛り沢山です。ご期待ください。

編集プロダクションも変え、無料の情報誌と同様に、紀伊國屋書店や丸善、在外公館、有名レストランでも入手できるようにします。併せてホームページの改革にも力を入れます。

新しい特報編集人には岸和田仁が、ホームページを含めた総括編集責任者には和田昌親がそれぞれ就任しました。といっても月1回の「編集会議」で議論しながら編集方針を決める合議制にしましたので、会員のご意見は反映しやすくなります。編集会議に参加を希望される方はご連絡ください。また原稿や秘蔵写真を温めておられる方、ぜひ投稿をお願いします。